

はじめに

近代の生殖をつらぬく思想＝コントロール

1. 歴史的概観

おおまかな流れ：捨て子・子殺し→堕胎（中絶）→避妊（不妊手術）→不妊治療・ART

18世紀フランス：7000人の捨て子、捨て子養育院と回転箱。里子の習慣。

19世紀前半～、新マルサス主義。救貧対策としての避妊。

出生率の低下 vs 人的資源の産出装置としての女性身体への関心、「母性愛」の強調。

「母性からの逃走」を批判、堕胎の犯罪化。産婦人科学の確立と性差二元論。

第一次大戦後、M・サンガーのバース・コントロール運動＝「出生を意思的に管理する」。
生殖コントロールとフェミニズムとの結合。

優生学的傾向の顕著化。「自発的出産抑制ができない人々には強制断種もやむをえない」。

セルフヘルプから「科学的」避妊法へ→ピルの開発、第三世界の人口過剰に対する国際家族計画援助活動。

市民権を得る避妊 vs 非合法の中絶。長い「暗黒の時代」→中絶合法化が欧米の第二波フェミニズムの悲願となる。1973年、米連邦最高裁「ロウ判決」により、中絶＝「権利」に。

1960年、ピル登場。「生物学的宿命」からの解放、性差のミニマム化。新たな避妊法（IUD、不妊手術、デポプロベラ、ノアプラント）の開発→避妊技術の医療化。

日本の場合：江戸中期から、幕府・藩による捨て子・堕胎・間引き禁止令や、妊婦・産婦の届け出制の動き。人口は停滞。

明治以降、人口増大。1920年代以降、産児調節運動の展開。「しても良い避妊」と「してはならない避妊」をめぐる議論。庶民の間では、避妊と堕胎は未分離。

戦時期の産めよ殖やせよ政策、避妊・堕胎＝非国民。

敗戦後の人口過剰→1948年、優生保護法による中絶合法化。

1950年代半ば～60年代、国策としての家族計画運動。「子どもは2人、計画的に」→「近代家族」の大衆規模での成立。

2. 生殖の歴史から見えてくること

1) 意味の多様性・可変性

例1：避妊のイメージ

例2：不妊手術の意味・役割

1924年、米の移民制限法。ヴァージニア州、異人種間結婚禁止法の強化と強制断種法の制定。強制断種の対象：「非行」白人女性から、第二次大戦後には有色の「福祉を受給する母親」へ移行。

一方、不妊手術は白人中流階級で最も人気のある避妊法の一つ。

2) 歴史的経験の差異とその影響

日本の場合：優生保護法による上からの中絶自由化。1970年代、改定運動をめぐるリブと障害者運動の「利害対立」。→女性運動の中に、「中絶＝権利」言説へのためらい。

障害者運動との対話の継続→中絶一般と選別中絶とを分ける考え方。

女の身体への権力・科学による介入への警戒→ピルへの対応、ARTへの否定的態度。

アメリカの場合：ロウ判決後の中絶論争、法廷闘争、暴力→プロチョイス派フェミニストにとって「チョイス」の死守は至上命題。

選別中絶、代理出産・卵子売買などのART利用についても、個人の選択権を重視。

3) 生殖コントロールと優生学的選別との不可分な関係

優生学＝生命の質的序列化による選別の思想。

選別の対象は文脈に応じて変化するが、選別の言説はバース・コントロール、家族計画、国際家族計画援助における推進力の一つ。

ポジティブ優生学とネガティブ優生学。

避妊法の開発から、出生前診断・着床前診断へ。

善玉・悪玉史観ではない、生殖の歴史を。

3. 近代家族と生殖テクノロジー

近代家族の特徴：(1)男女の異性愛と婚姻により成立、(2)家族成員間の愛情の重視、特に子ども中心主義と母性愛の強調、(3)性別役割分担による運営、(4)国家による管理の基礎単位。

もう一つの自明の前提：(5)生殖の計画化・管理化。避妊・中絶という生殖技術は、近代家族の成立・維持・再生産に不可欠の役割。

規範どおりの家族をつくれない人々の欠損感と家族への欲望。

フェミニズムは「産まない権利」の獲得にのみ熱心、生物学的生殖年齢についての情報提供には不熱心→気がつけば「不妊」に。

↓

テクノロジーに頼る意のままの生殖管理志向は、「産む方向」に向かう。

ART（生殖補助医療技術）は、もともと近代家族規範に同調的・協力的。

e.g. AIDにおける事実の隠蔽と「ふつうの家族」の偽装

体外受精の対象を法律婚夫婦に限定

フランスやドイツにも、ARTの利用目的を近代家族規範の維持・補強に限定しようとする傾向。

一方で、アメリカを中心に生殖の商品化・市場化の進行。体外受精技術の登場による生殖概念の根本的変化→異性愛カップルの規範的近代家族づくりのみならず、技術の利用者として想定外の人々にも「家族づくり」の道を開く。

↓

近代家族規範の相対化、家族概念の持つ排他性やフィクション性を可視化。←「家族の多様性」を可能にする、歓迎すべき変化？

一方で、「産む／産まないも金次第」の風潮の強化。